

非認知能力を育てる「ヒミツキチ」という場

～不登校支援における野外活動の意味～

不登校状態にある児童生徒は、学習意欲や能力そのものを失ったわけではない。多くの場合、学校という集団環境の中で、学びや人間関係を支える非認知能力—自制心、自己効力感、やり抜く力、社会性—が十分に発揮できなくなっている状態にある。教育経済学者・中室牧子氏は、こうした非認知能力が将来の学習継続や社会参加に大きく影響することを、実証研究に基づいて示している。

ヒミツキチの野外支援は、非認知能力を「教える」のではなく、自然に発揮される環境を意図的に設計している点に特徴がある。たとえば、焚き火や調理、道具を使った作業では、危険を回避するために自分の行動を調整する必要がある。ここでは「走ってはいけない」と指示されなくても、状況を見て行動する自制心が自然に引き出される。

また、ヒミツキチで行われるテント設営や拠点づくり、野外での活動準備は、すぐに結果が出るものではない。うまくいかずにやり直す経験や、途中で投げ出したくなる場面も多い。しかし、最後まで関わることで達成感を得るこの過程こそが、やり抜く力を育てる実践となっている。

さらに、ヒミツキチでは活動ごとに明確な役割が生まれる。火の管理、食材の準備、片付け、記録、仲間への声かけなど、どれも欠けては成り立たない役割である。点数や評価はなくとも、「自分がいなければ困る」「役に立った」という実感は、自己肯定感ではなく自己効力感として子どもに積み重なっていく。

野外活動はまた、正解のない状況での協働を求める。天候や参加者の体調によって計画は柔軟に変わり、話し合いや調整が不可欠となる。ヒミツキチの場では、指示に従うのではなく、自分の意見を出し、相手の考えを聞きながら進める経験を重ねることで、社会性や対人調整力が自然に育まれていく。

重要なのは、ヒミツキチの野外支援が「学校の代替」ではないという点である。非認知能力が回復・育成されてこそ、再び学びに向かう力が機能し始める。ヒミツキチは、不登校児童生徒が学び直しや社会との再接続に向かうための土台を整える場であり、その役割は極めて本質的である。

野外という非日常の中で、子どもが自分の力を取り戻していく過程は、教育経済学の知見とも整合する実践である。ヒミツキチの取り組みは、不登校支援における非認知能力育成の具体モデルとして、大きな意義を持っている。

<ヒミツキチの案内>

趣旨：私たちヒミツキチは、子ども時代に全身を使って遊びぬいた記憶が、私という存在を形づくると考えています。

自由な「遊び」を通して非認知能力が育まれ、豊かな自然の中の自分だけの世界に十分浸れる時間を、子どもたちに取り戻してあげたいと思うのです。

〒889-2161 宮崎県宮崎市加江田 6411

<https://himitsukichi.org/>

TEL：070-1388-5589